

10. 口腔扁平苔癬の発症および病態形成における

Toll-like receptor シグナルの関わり

¹⁾大野清二、立石善久、山本哲也

¹⁾高知大学医学部歯科口腔外科学講座

【目的】口腔扁平苔癬(OLP)は中高年の女性を中心に比較的高頻度に認められる慢性炎症性疾患であるが、その病因は未だに明らかにされていない。近年、病原体認識に必須の受容体であるToll-like receptor(TLR)が自然免疫のみならず獲得免疫にも影響を及ぼし、種々の炎症性疾患を中心とした病態の発症・進展に関与していることが明らかになってきている。そこで今回われわれは、OLPの発症および病態形成にTLRを介するシグナルが関与しているか否かについて検討した。

【材料および方法】正常口腔粘膜およびOLP罹患粘膜の上皮細胞におけるTLR2/4の発現を免疫組織化学染色にて検討した。これとともに、健常人およびOLP患者より分離した末梢血単球におけるTLR2/4/9の発現をフローサイトメリー法にて検討するとともに、分離した単球をTLR2/4/9リガンドの存在下で24時間培養した後、培養上清中に産生されたIFN- γ およびIL-12量をELISA法にて測定した。

【結果】OLP罹患粘膜上皮におけるTLR2の発現は正常粘膜上皮に比べて増強しており、その発現増強は基底細胞層により強く認められた。しかしながら、TLR4の発現は両者間において有意差は認められなかった。一方、OLP患者の末梢血単球は健常人のものと同様にTLR2およびTLR4をより強く発現しており、末梢血単球のサイトカイン産生(IFN- γ およびIL-12)においては、OLP患者の末梢血単球は健常人のものと同様に比較してIFN- γ 産生能には差はなかったものの、IL-12産生能が亢進していた。

【考察】OLP 病変部の上皮細胞における TLR2 発現は正常粘膜上皮に比べ増強するとともに、OLP 患者末梢血単球における TLRリガンド刺激によるサイトカイン産生も亢進しており、OLP 発症および病態形成に TLR シグナルが関与している可能性が示唆された。